

雨宮栄一先生から『フリードリヒ・ユストゥス・ペーレルス 告白教会の顧問弁護士』を贈っていただいた。先生は私を覚え、上梓された本をいつも贈ってくださり、恐縮している。どの著作も大部で読み応えがある。先生は1927年生まれで、米寿を迎えておられるが、知的好奇心の高さエネルギーには敬服する。そして、先生の著書は緻密に検証され、納得させられる。また、人に対する優しさが伝わり、読んでいて嬉しい思いになる。読後感を週報の「牧師室より」にいつも書いてきた。『F・J・ペーレルス 告白教会の顧問弁護士』は映画を観るような臨場感があり、興味深く一気に読んだ。

ヒトラーのナチズムが台頭してきた時、これに疑義を持つ教会人が「バルメン宣言」に表された信仰に基づいて「告白教会」を形成した。K・バルト、D・ボンヘッファー、M・ニーメラーなどが中核を担った。告白教会に対し、ナチズムは過酷な取り締まりと迫害を加えた。これを「ドイツ教会闘争」と言っている。その中で、信徒のペーレルスは告白教会の顧問弁護士として、命を賭して協力し、支援した。ドイツ教会闘争はキリストの主権告白を貫いた神学的な論争として学んできたが、歴史的には血みどろな闘いであり、信徒の大きな支えがあったことを、改めて知らされた。

ペーレルスは子どもの頃から信仰を学び、純真な信仰を育んでいった。ハイデルベルグ大学とベルリン大学で法律を学び、司法試験に合格し、弁護士になった。祖父がユダヤ人で、ユダヤ人の血を受け継いでいる。ナチ政府は一元化を押し進め、異質なものを排除する政策を取った。アーリア条項の下、ユダヤ人を排斥し、集団虐殺に走っていった。ペーレルスは、この政策に危機感を持ち、またボンヘッファーとの出会いがナチズムに対峙する告白教会と深く結び合っていた。告白教会は正義と人権を無視する法の下で、活動を狭められ、メンバーは次々と逮捕されていった。ペーレルスは収容所を訪ね、家族を訪問し、献身的に釈放のために働いた。その彼も逮捕される。釈放された後、法学者になろうと博士論文を書き、告白教会から離れようとしたが、必要に迫られ、告白教会の弁護活動を続ける。また、ナチ政府は心身障害者の安楽死を計る政策を打ち出す。この頃から、ナチ政府の教会迫害と戦う「教会闘争」から「政治闘争」へと変わっていく。

ヒトラー暗殺事件が起こるが、失敗を重ねる。そのような中で、有名な「ヴァルキューレ作戦」と言われる緻密に計画されたヒトラー暗殺のクーデターが起こる。これも失敗し、関わった人々は連座制で家族も逮捕され、多くの人々が処刑された。ペーレルスもクーデター計画を知り、関わったとして逮捕される。裁判とは言えない一方的な審議によって、死刑が宣告される。ベルリンは連日、爆撃され、ソ連軍が身近に迫っていた。ペーレルスたちは釈放命令を受け、外に連れ出された。突然、親衛隊員に壁に並ぶように命じられ、「撃て」という声が出て、機関銃が火を噴き、路上で処刑された。1945年4月22日、ドイツ敗戦の15日前である。享年34歳の若さであった。

ペーレルスは妻ヘルガ・ケラーマンに獄中から、次のように書き送っている。「全てがどのようになるか、我々は何も分からない、しかし、神のみは知っておられる。神はここで私を見捨てられることはない。君も神を強く信頼しなさい。神は甦り生きて居られる。」

1996年、ベルリン刑事法廷はボンヘッファーやヒトラーに抵抗したグループに対し「彼らの動機は破壊ではなく、祖国愛であり、人類のために身を捧げることであった」と司法から名誉回復を得ている。雨宮先生はペーレルスも当然含まれると注釈を加えている。